

ホームホスピスわれもこうでの看取り

ホームホスピスわれもこう家族会会長

木下 昌子

夫がインフルエンザ脳症を患い入院生活となったのは、2008年4月です。救急病院、リハビリテーション病院を経て退院してもよいと言われましたが、夫婦2人暮らしで子どもたちは県外におりましたので、とても私一人で介護ができるような状態ではありませんでした。退院先を探していたときに「ホームホスピスわれもこう」に出会いました。

われもこうのお茶の間で最初のケース会議のとき、「木下先生のことを話すのだから、先生にも加わってもらいましょう」と夫を車椅子のまま10人くらいの輪の中に入れて下さいました。最初私は「夫は何も話せないのに参加しても…」と思いましたが、なんと皆を眺めながら時々うなずいていたのです。それから夫はわれもこうでミトンを外してもらい生活していたのには、本当に驚きでした。気管切開し、鼻腔栄養の夫は、病院ではミトンの手袋をしているのが決まりでした。夫の部屋の窓からはお庭が見えるし、お台所も近くにあるので、口から食べれなくても美味しい匂いがするし、生活の音や話し声、笑い声が聞こえて寂しくなくていいな、と思いました。

われもこうのオープニング記念にアマチュアピアニストの息子、淳のリサイタルを近所の公民館で開くことになりました。夫も車椅子で参加させていただき大勢の参加者と一緒に拍手をしていました。手もかなり不自由になっていたのに、介護してくださる方が「先生が拍手してる！」とびっくりして喜んでくださいました。夫はスタッフの方々を信頼し、話はできないのですが、笑顔を見せたり表情を変えたりして反応していました。また、大学で教鞭もっていたので、ある時、実習の看護学生さんたち

と会ったことで現役時代を思い出したのでしょうか。私は久しぶりに夫の笑顔を見ました。

われもこうでスタッフの方と生活する中で、スタッフの方がいろいろ困った時「木下先生、どうしたらいいでしょう、と話しかけると、めったに開かない目がうっすらと開き、メッセージを下さるようだった」と聞いて、びっくりしうれしかったです。ケアスタッフの方が、入居している人が何を思っているかを汲み取ろうとして下さる事が何よりうれしかったです。

時々、われもこうに泊まらせていただき、夜中にどんなお世話をしていただいているか知らないでいては申し訳ないと思うのですが、私はいつも朝までぐっすり寝てしまうのです。亡くなる前夜もいつものように泊めていただき、大きい息もなく全く穏やかだったので、脈が止まった瞬間に気づきませんでした。

「われもこう」で4年3ヶ月余りを過ごした夫のお通夜の時、スタッフの方がお花に添えたカードに「私たちは木下先生の最終講義を受けることができました」と書いて届けて下さいました。

夫は突然、目も口も手足も不自由になって、さぞかし不本意だったでしょう。でも、われもこうで意志を確認してもらいながら生活するうちに、力がわいてきたのだと思います。介護する側と受ける側の「双方向のやりとり」や「対等であること」は、生きる意欲に直結していると私は思います。

夫が病気になった事は仕方がなかったのですが、病いを得なかったら出会うはずがなかった「われもこう」に出会い、またたくさんの方たちと知り合うことが出来ました。絆の深さが身に沁みて嬉しく、感謝、感謝でございます。